

第 16 回卒論・修論研究発表セミナー 研究発表・ポスター発表 要旨

午前部

①9:40~10:10 ②10:15~10:45 ③10:50~11:20 ④11:25~11:55

*発表タイトル前の G は卒業論文、M は修士論文の発表です。

【第 1 室】(B204) テーマ: 小学校外国語活動 (文字導入・読み聞かせ)

コメンテーター: 長谷 尚弥 (関西学院大学)・吉田 晴世 (大阪教育大学)

① G: 小学校における文字を書く活動

島仲 奈穂
(大阪教育大学)

“音声へ慣れ親しむこと”が重視されている小学校外国語活動において、「文字指導の導入」の可能性を提案する。まず、実践授業では、文字への興味を持たせるよう、先頭文字の音声に着目させるよう、画像を用いた PowerPoint やゲームで、視覚的・聴覚的に文字に触れるようにした。次に、実際に文字を書く活動を行った。ワークシートやアンケートからは、児童が“文字を書くこと”との出会いを楽しんでおり、また、音声と文字を結び付け、先頭文字等の認識や理解をしていることが分かった。

② G: 小学校での第二言語語彙習得における文字導入の効果

杉本 隼也
(京都教育大学)

文字は音声によるコミュニケーションの補助的なものとして用いられると学習指導要領に明記されている。そこには、文字を用いることは小学校の子供には負担になるという懸念がある。しかしながら、諸外国の外国語活動では文字は積極的に用いられている。文字は子供たちのモチベーションや理解力を高めるのではないか。文字も一つのコミュニケーションのツールであり音声と切り離すことはできない。本研究では、文字を含めた指導と文字なしの指導での単語の理解度の違いについて言及する。

③ G: 日本の小学校での絵本の読み聞かせにおける状況モデルの構築についての事例研究

藤森 美鈴
(京都教育大学)

本研究では、絵本の読み聞かせにおける小学生の状況モデルの構築について分析した。絵本は英語に慣れ親しませるためのアイテムとして活用されているが、実際に小学生がどの程度絵本の内容を理解できているのか、5つの状況モデルを基に実験を行い考察した。また、母語やジェスチャーの使用がそれにどう影響するのかを検証するために3つの方法に分けて分析した。

- ④ G: リテラシー能力を育てるボトムアップ・トップダウンアプローチの統合的指導の効果
松原 加奈 (京都教育大学)

小学校外国語活動におけるトップダウン・アプローチとボトムアップ・アプローチの統合を目指した教授法に焦点をあてる。英語初学者のリテラシー能力を伸ばす指導を目的とし、フォニックス指導のみ、絵本の読み聞かせのみ、それら両方を実施の3群に分け公立小学校5年生を対象とした調査を実施した。発表では各群ごとのテストの結果とアンケートを基に研究結果の検証をしていく。

【第2室】(B205) テーマ: 映画・異文化理解
コメンテーター: 谷村 緑 (京都外国語大学)・藪内 智 (京都精華大学)

- ① G: 映画『英語完全征服』に見る英語熱と韓国らしさ
富永 祥子 (京都府立大学)

韓国では英語教育が盛んであるということは近年メディアでも紹介されている。この英語教育は「英語熱」とよばれ、韓国では社会問題にもなっている。この論文では、韓国映画『英語完全征服』における英語熱批判と韓国らしさの描写について論じる。本映画の目的は単なる英語熱批判ではない。この映画では韓国の伝統や文化、言語の良さを描くことに力を入れているように思われる。それらを描くことで英語熱の行き過ぎを警告し、韓国特有のものにも目を向けてほしいというメッセージを送っているのである。

- ② G: 小学校外国語活動における映画の活用
—内容に興味をもって「聞く力」を育てるために—
和田 春香 (大阪教育大学)

映画は英語学習教材としてその効果が注目されながらも、小学校外国語活動ではあまり活用されていない。そこで本研究では、(1) ビデオクリップ(リスニング教材)の開発、(2) 「聞く力」高める映画の活用、(3) 異文化理解の教材としての映画の活用、について考察する。授業実践を日本・スウェーデンで行い、アンケート分析を行った。日本(82%)スウェーデン(96%)の児童が動画(映画)を使った授業に「楽しい」と答えており、映画の活用の可能性は高いと考える。

- ③ G: 英訳『ONE PIECE』における漫画オノマトペの研究

鈴木 光
(京都府立大学)

漫画『ONE PIECE』に観察されるオノマトペのリストから、英訳漫画におけるオノマトペの特徴を(1)頻度、(2)非語彙的オノマトペ、(3)創造性、(4)音の四点から論じる。また、漫画翻訳における二つの翻訳手法、domesticating と foreignizing についても言及する。『ONE PIECE』のオノマトペが巻を追うごとに後者の方法で翻訳される傾向にあることを示し、その要因として海外漫画市場の参加型文化、ネット上の読者たちの意見なども紹介する

- ④ G: 映画を使った上昇調と下降調の付加疑問文の研究

嶋崎 絢
(京都府立大学)

本発表では、付加疑問文のイントネーション、特に上昇調および下降調を分析し、まず上昇調および下降調のトーンが使用されている状況を、3つの映画から89例の付加疑問文を用いて調査・分類した。次にその分類から両トーンを用いた付加疑問文の機能を分析し、最後にそれらの機能を基にして上昇調及び下降調の付加疑問文の定義を検討した。さらに恒常極性付加疑問文の使用についても映画の中の実例から検討した。

【第3室】(B206) テーマ: 語彙学習
コメンテーター: 赤松 信彦 (同志社大学)

- ① M: TPRによる文法指導および語彙指導による指導効果の研究

浅井 玲子
(京都外国語大学)

高校生への文法指導の問題点として「教えたことが定着しない」と「習った文法項目が使えるようにならない」ことがあげられる。自分の行ってきた授業を振り返り、TPRを使って文法指導をした場合と、従来の筆者の教え方で指導した場合とどちらがより長期にわたり指導効果が見られたかを検証した。調べた文法項目は「分詞構文とwithを使った付帯状況」および「受動態の現在完了と現在進行形」である。いずれの場合もTPRで指導した方に効果が見られた。

- ② M: 語彙学習方略と英語テストの関係分析

池田 和美
(大阪教育大学)

関西の大学生・大学院生を対象に、各自の語彙学習方略に対するアンケートと3つの英語テストを受験してもらい、テスト得点により上位群・中位群・下位群と分類した。そして、上位群には他の2群には見られない語彙学習方略の特徴があるのかを、相関分析、統計分析、群間分析の結果から解明を試みた結果を発表したいと思います。

- ③ G: 中学生に対する単語カードを用いた英単語学習法の研究

後藤 久也
(大阪教育大学)

英語学習において、教師による授業での指導はもちろんだが、生徒自身による家庭での自律学習が重要である。この研究では、自分で覚えたい単語を選択し自分でカードを作成するという、単語カード学習法に着眼し、学習記録を記述することで、動機付けを維持し自律学習を促進することができるかどうかを調査した。附属中学(2年生10名、1年生2名)を対象に、10回放課後学習で実施した結果、単語学習の目的を持つ生徒にとっては有効に働くことが実証された。

【第4室】(B207) テーマ: 認知言語学・コーパス

コメンテーター: 木原 恵美子(神戸大学)・水本 篤(関西大学)

- ① M: 英語動詞派生前置詞の文法化に関する認知言語学的考察

林 智昭
(京都大学)

英語動詞派生前置詞は、動詞が文法化した周縁的前置詞であるとされてきた。本論では、これらを研究対象とし、認知言語学の観点から分析を行う。具体的には Emonds(1976)の判別テストにより前置詞としての典型性を示すか否か、統語的・意味的パラメーターは何か、認知言語学の身体性の観点に基づく動詞の下位分類を行う。

- ② G: 名詞の可算性に関する考察

矢野 利佳
(京都府立大学)

この論文では、英語名詞の可算性とその他の文法項目や使用頻度との関連を調べた。まず名詞の可算性について、先行研究から文法的規則、可算性テスト、「話者による指示対象の個別化(individuation)」の3点から概観をまとめた。次に3つの不可算名詞に注目してコーパスを用いた調査を行い、可算用法と、限定詞、修飾語、名詞ごとの個別性の確立との関係について分析し、またその結果と話者による指示対象の個別化との関係についても検討した。

- ③ M: 母語話者及び日本人学習者による基本前置詞使用

松下 英利香
(神戸大学)

本研究では、英語の基本前置詞に焦点を絞り、(1)大規模コーパス(BNCとCOCA)に基づく母語話者の前置詞使用傾向、(2)学習者コーパス(ICNALE)に基づく学習者の前置詞使用傾向、(3)教科書コーパスに基づく教材での前置詞の扱い、について量的な調査・分析を行い、今後の英語教育における前置詞指導の指針について考察を行った。

- ④ M: 日本人学習者の名詞コロケーションにおける TAKE の使用特徴

大内 啓樹
(立命館大学)

本研究では、日本人英語学習者の名詞コロケーションにおける TAKE の使用特徴を、アジアの英語学習者や英語母語話者と比較分析し、調査した。EFL 学習者にとって、直接目的語と適合する基本動詞の選択は非常に困難とされる。本研究の結果、脱語彙化した TAKE の過剰使用、TAKE の語義のコアとなる意志性の理解不足などが明らかとなった。また、文脈によってコロケーションの容認度が変わることも示唆された。

【第 5 室】(B208) テーマ: 小学校外国語活動 (コミュニケーション)

コメンテーター: 生馬 裕子 (大阪教育大学)・今井 裕之 (兵庫教育大学)

- ① M: 小学校外国語活動における絵本の読み聞かせ
—視覚情報理解と因果関係性に焦点を当てて—

大江 太津志
(京都教育大学)

小学校外国語活動での絵本の読み聞かせにおいて、「絵を読み解く」能力が物語内容の因果関係性理解にどのような影響を及ぼすか考察した。絵本の絵の情報かテキスト情報、内容の事実か因果関係にそれぞれグループを分けそれぞれ焦点を当てて指導した。絵とテキスト間に差は見られなかったが、事実焦点を当てたグループが因果関係グループを統計上有意に上回った。深い理解を促すためには、絵の表わす事実をまず十分に意識できるような読み聞かせ方をすべきだと結論づける。

- ② M: 小学校外国語活動における落語を用いたタスク型学習が小学生にどのように受け入れられるか

竹田 里香
(関西大学)

小学校外国語活動がコミュニケーション能力の素地を養うという目標のもと始まった。英語も母語と同じ「ことば」であることを体験的に感じる事が大切であると考え。落語は日本の伝統文化の一つで究極の話芸である。その落語の特徴の中から?話の中に落ちがある。?一人で何役もする発表スタイル。?友達の発表に「つつこみ」をいれる。を取り入れたタスク型学習が、小学校6年生にどう受け入れられるか、また、英語に対する意欲・関心・態度の上位・中位・下位の3群の間で差があるのかをケーススタディーとして検証した。

- ③ G: 小学校外国語活動におけるコミュニケーション活動
—インフォメーションギャップ活動をととした活動—

小泉 皓太
(大阪教育大学)

小学校外国語活動におけるコミュニケーション活動の実際を『Hi, friends!』の具体的な例から分析し、また、実際にコミュニケーション活動をととした授業を行う。本研究ではコミュニケーションの条件を情報の差異があることと定義して、話す活動、聞く活動に分け、話す活動のうちインフォメーションギャップのある活動がどの程度とりいれているのか調べた。例えば、『Hi, friends! 1』Lesson3「りんごがいくつあるかたずねよう」である。全体では少ないためインフォメーションギャップを利用した活動を「Hi, friends!」のアクティビティから作成して、実際の授業からその効果を報告する。

- ④ G: 小学校外国語活動における「コミュニケーション能力」

吉川 祐希子
(大阪教育大学)

小学校外国語活動におけるコミュニケーション能力を育成するための、方略的能力を用いた外国語活動を「Hi, friends!2 道案内をしよう」を用いて考案する。方略的能力を使用するような授業を実践し分析を行った。子どもたちは相手に伝えるために、方略的能力を使用しコミュニケーションを図っている様子が見られた。特に「LS1-反復」「CS8-非言語の指示」「CS11-言語の転換」といった方略をよく使用していた。今後、子どもたちの方略的能力を伸ばす指導を行うことは、コミュニケーション能力の育成につながると期待される。

【第6室】(B209) テーマ: コミュニケーション・方略

コメンテーター: 玉井 健 (神戸市外国語大学)・加賀田 哲也 (大阪教育大学)

- ① G: コミュニケーションにおける存在論的諸相

吉田 雄太郎
(京都教育大学)

新学習指導要領におけるコミュニケーションの重要性から、現在普及しているコードモデルについて考え、批判し、コミュニケーションにおいて必須であるコミュニケーションストラテジーの背景を見て、コミュニケーションはどうあるべきで、どのようなコミュニケーションが良いかを考えていく。さらに、コミュニケーションが行われる際には目には見えないが、意味の生成が行われているはずであり、それを存在論的にアプローチしていき、コミュニケーションはコードモデルでは説明しきれないということを見ていく。

-
- ② G: コミュニケーションを維持・促進させる口頭コミュニケーション方略の指導: 英国人日本語学習者の事例研究

折笠 阿香音
(京都教育大学)

80年代からコミュニケーション方略の研究が活発になり、その分類や指導の是非を含め数多くの議論や実践がなされてきた。しかし、それらのほとんどが問題解決型の方略に焦点が当てられており、それ以外の方略は考慮されていなかった。従来のコミュニケーションの本質や方略的能力の枠組みから、問題解決型だけではなく、コミュニケーションを維持・促進する方略もコミュニケーション方略であると捉えなおし、モデルを提案する。また、その方略である相槌やフィラー等に焦点を当てた指導法を提案し、英国人日本語学習者に対して実践した。その結果から指導前後の変化を分析し、指導の在り方や今後の方向性を考察する。

-
- ③ G: タスクタイプ別のCS指導
— 初学者に対するその効果と動機づけ —

鈴木 悠莉亜
(京都教育大学)

中学校英語教育において、コミュニケーション能力の育成とコミュニケーション方略の指導が新学習指導要領の中に取り上げられている。この点に注目し、本論文ではコミュニケーション方略を異なるタスクの中で明示的に指導し、その指導効果を方略の定着度、事後テストの点数、動機づけの観点から検証する。

-
- ④ G: シナリオタスクを使ったコミュニケーション方略教授におけるペアごとのインタラクションの違い

水谷 友梨
(京都教育大学)

近年、小学校英語が始まり、中学校・高等学校でも、コミュニケーション能力を高める英語を学ぶことが求められている。日本人が英語を話せない理由の一つとしては、英語を話すことに慣れていないことが挙げられる。本研究では、目標言語が使われる疑似コンテキストを作り出すシナリオタスクを使い、明示的コミュニケーション方略教授を受けるグループと学習者自身が話し合っ問題解決するグループに分け、高レベル同士のペア、低レベル同士のペア、高レベルと低レベルのペアという3種類のペアにおけるインタラクションの違いを調査した。

ポスター発表

ミニプレゼン

12:00~12:10

コアタイム

12:10~13:00

*発表タイトル前の G は卒業論文、M は修士論文の発表です。

【第3室】(B206)

M: 小学校外国語活動の協同的な活動における学習者の行動分析-社会文化理論に基づいて-

坂詰 由美
(兵庫教育大学)

本研究の目的は、小学校外国語活動における児童の対話を社会文化的理論の観点から分析し、児童の言語習得のプロセスに迫ることである。協同学習の理論にもとづいてデザインした外国語活動を実践し、協同的活動での会話記録を自覚性と随意性に焦点を当てて分析する。特に、言語への自覚性と随意性は活動の目的、発話者の関係性においてそれぞれどのように異なるかを明らかにし、言語習得上望ましい学習活動の条件を提案する。

G: 日本の小学校におけるイマージョン教育について

山岡 直貴
(大阪教育大学)

論文の目的は「日本のイマージョン教育機関への視察、あるいは日本や海外におけるイマージョン教育の特徴や長所・短所を研究することを通して、これからの日本の小学校外国語活動によりよい示唆を与える」ということです。イマージョン教育の一番良い点は「内容を重視した言語教育である」という所だと私は考えますので、この点を現在の教育システムの中にも取り入れることのできる方法をご紹介しますと思います。

M: Investigating How Japanese EFL Learners' English Rhythm of Vowel Duration Changes Through Experience of Studying in English Speaking Countries

鈴木 一大
(立命館大学)

The present research attempted to investigate how the experience of studying in English speaking countries after age of 15 facilitates Japanese EFL learners' English rhythm in terms of vowel duration to improve. 24 participants were divided into 4 groups according to their first language, experience of studying in English countries, and English proficiency. The groups were English native speakers (NS), Japanese speakers who studied in English speaking countries more than 18 months after age of 15 and have TOEIC score of at least 730 (JT730S), Japanese speakers who have not studied abroad more than 3 months and have at least TOEIC score of 730 (JT730), and Japanese speakers who have not studied in English speaking countries and have TOEIC score of less than 600 (JT600). They read aloud five English sentences, and vowel duration was investigated, and nPVI, VarcoV, and ΔV were computed. The results suggested several findings and implications. First, the results suggested that Japanese EFL learners' difference of successive vowels (nPVI) and normalized vowel duration's variation in a sentence (VarcoV) do not become equivalent to native speakers' through experience of studying in English speaking countries after age of 15. English nPVI and VarcoV rhythm of the Japanese EFL learners who had studied in English speaking countries (JT730S) were not significantly different from English nPVI and VarcoV rhythm of the Japanese speakers who did not study in English speaking countries and have the same English proficiency (JT730). Native speakers (NS) of English had higher nPVI and VarcoV value than the Japanese group who studied in English speaking countries (JT730S) and the group who had TOEIC score of lower than 600 (JT600). Secondly, Japanese speakers' difference of successive vowel durational (nPVI) improved through acquiring proficient English ability. Both JT730S and JT 730 had significantly higher nPVI value than Japanese EFL learners who had TOEIC score lower than 600 (JT600). Third, vowel duration's variation in a sentence (ΔV) has to be normalized in order to control speech rate since ΔV of NS, JT730S, JT730, and JT600 were not significantly different. ΔV did not distinguish four groups. Fourthly, the ratio of stressed vowels divided by unstressed vowels suggested that experience of studying in English speaking countries and acquiring high English proficiency were necessary to have the ratio similar to native speakers.

午後の部

⑤14:45~15:15

⑥15:20~15:50

⑦15:55~16:25

⑧16:30~17:00

*発表タイトル前の G は卒業論文、M は修士論文の発表です。

【第1室】(B204) テーマ: 教師・小学校外国語活動

コメンテーター: 有本 純 (関西国際大学)・福智 佳代子 (神戸海星女子学院大学)

⑤ M: 教師は「英語を英語で教える」をどのように扱うべきか ～「優れた教師」の実践をもとに～

鈴木 翔大
(大阪教育大学)

本研究では、新学習指導要領において高等学校で「英語を英語で教える」という文言が追加されたことを踏まえ、高校および中学の現場で今後どのように授業を行うべきか議論した。まず、日ごろ「英語を英語で」指導している中学・高等学校の教員3名にインタビューを依頼し、英語で授業をする利点や欠点、英語を使う場合の工夫等についてうかがった。その後、中・高の「優れた英語教師」(中3名、高3名)による実践をビデオ観察し、使用場面の観点から場面ごとに分析した。

In 2011, Foreign Language Activities (hereafter FLA) for elementary school fifth and sixth graders was implemented. Most of the elementary schools in Japan have introduced English for FLA, which centers on listening and speaking. This implementation surely provides students more input of English.

In elementary school in Japan, normally homeroom teachers teach every subject, which means that FLA is conducted by them as well. Since the introduction of FLA is a new attempt to elementary school teachers, many of them have scarce experiences of teaching it. They know how to teach other subjects, so they may utilize the knowledge on them into FLA. Then, what can novice teachers refer to when they conduct FLA? Novices will resort to what they have learned in their teacher-training courses as pre-service teachers. Still, they do not have ample experience as teachers, which makes them feel anxiety toward teaching FLA. What can give them confidence to conduct FLA is a good command of English, which is directly related to the objectives of FLA-listening and speaking.

In this study, the author participated in an English course for pre-service teachers of elementary school as a teaching assistant. The

⑥ M: The Effects of Training in Oral Skills on Prospective Elementary School Teachers

石水 明香
(奈良教育大学)

course is a compulsory one and taken by non-English major students. The objective of the course is to improve English proficiency through listening to simple English stories, which can be utilized in FLA. The course is conducted partially in English while Japanese is used as a vehicular language. The students listen to a new story twice first, and then a modified version is presented by the author. They take notes while listening so that they can work on comprehension checks afterward. With the comprehension checks, they engage in pair work; here they work on speaking. They are given opportunities to present their own reproductions of the story in class.

Modified speech-teacher talk was utilized in the course. Every time the students struggled to catch up with the course where the common language was English, the author provided modified English, which helped them to improve both of their listening and speaking skills. Before and after the students self-evaluated four skills (listening, speaking, reading and writing), and they rated them higher. Improving listening and speaking have given them confidence in not only their English but also conducting FLA for their future task.

⑦ G: Hi, friends!における活動設計の視点とその具体例

中西 優未
(大阪教育大学)

本発表では、小学校外国語活動において教師が Activity を考案する際にどのような視点が大切かを議論したい。つまり児童が外国語活動を通して、英語を言語として習得するだけでなく、積極的に取り組み、より「学びのあるもの」に繋げるためにはどういった視点を取り入れればよいか、また、それらの視点を参考に“Hi, friends!”のいくつかの Activity について活動例を提案したい。

⑧ G: 外国語活動におけるパペットの活用の効果

小松 由佳
(大阪教育大学)

小学校外国語活動におけるパペットの活用とその効果について考える。遊戯療法の一つであるパペットセラピーは、研究が進むにつれ、小学校における教科教育にも応用されつつある。そこで、本研究では、1)児童の心を開き、つい英語を口にしてみたくなるようなパペットの活用、2) 授業実践のアンケート結果からみる効果について考察する。その結果、パペットは児童の想像力をはたらかせる助けになったり、学習理解を深める役目を果たしたりしていることがわかった。

【第2室】(B205) テーマ: 英語学習における文化・文学
コメンテーター: 加藤 雅之 (神戸大学)

⑤ M: 「聞き手」におけるポライトネス・ストラテジーの考察

湯谷 綾子
(京都教育大学)

会話の参加者は相手や自分の面子(フェイス)を脅かさないように、適切な方略(ポライトネス・ストラテジー)を選択している。しかし「適切な」方略は言語や文化によって異なり、母語の方略を対象言語に流用することで意志疎通の齟齬を引き起こしてしまっている。本論ではブラウン&レビンソン (1978)の理論を元に、会話の「聞き手」に焦点を当てその方略を考察する。またその結果を英語教育にどのように活かせるか提案を行う。

⑥ M: EFL 環境における家庭内の英語学習資本と英語学習到達度の関連性 —Bourdieu の文化資本論の観点から

秋篠 遼平
(立命館大学)

本研究は、Pierre Bourdieu(1930-2002)の文化資本論をもとに、家庭における文化資本としての英語学習資本量と幼少期の教育投資量が個人の各教育段階での英語習熟度いかに影響を及ぼしているかを調査することを目的とする。大学生大学院生に対して行った質問紙調査 (N=270)を分析した結果、両親の英語習熟度がアスピレーション効果としてその子女の英語学習に影響を及ぼすことが確認された。さらに中学校の成績がその後の学習者の英語習熟度に有意に影響を及ぼすことも同時に確認された。

⑦ G: 『ジェイン・エア』の研究：
地位に対するジェインのしたたかな意図

松山 薫子
(京都府立大学)

Charlotte Bronte の作品 Jane Eyre を取り上げ、主人公の Jane が自身の社会的地位の回復と、家庭内における地位の確立を目的として Mr. Rochester との結婚を望み、その実現のために彼の理想の女性として振る舞う、したたかな女性であることを考察する。第一章では彼女の地位へのこだわりと他人への優越感について述べる。第二章では、彼女が Mr. Rochester の興味を引くために、彼の理想の女性像を演じていることを述べる。第三章では、Jane が St. John の求婚を断った理由を考える。

- ⑤ M: 日本人英語学習者の言語産出における統語的プライミングにインプットのモダリティおよび接触回数が及ぼす影響

与那嶺 裕紀
(神戸大学)

本研究は、日本人英語学習者の統語構造の習得過程を明らかにするため、統語的プライミング手法を用いて、インプット時のモダリティ(音声または文字)の違いがその直後の言語産出に及ぼす影響と、特定の統語構造を持つ文への接触回数の増加による言語産出への影響を調査した。その結果、文字よりも音声によるインプットの方が高いプライミング率を示し、特定の統語構造への接触回数の増加に伴ってプライミング率が向上し、累積効果がみられた。

- ⑥ G: 日英プライムによる統語的プライミング効果の比較

万波 彩乃
(京都教育大学)

統語的プライミング効果とは、以前に受けた統語構造による刺激が、後の言語産出に影響を与えることである。日本人英語学習者(日本語母語話者)を実験協力者として、絵描写課題において与えられる言語(英語もしくは日本語)によって、統語的プライミング効果及び産出される文、英語習熟度の違いがみられるか比較分析を行った。統語構造として、受動態と能動態、授与動詞構文(PO構文とDO構文)を取り扱った。

- ⑦ M: フォーミュラ連鎖の反復学習が文産出の流暢性と正確性に与える影響

下吉 真衣
(関西学院大学)

円滑なコミュニケーション活動には言語処理の自動化が不可欠である。反復学習により言語情報を何度も処理すると、学習内容が長期記憶に潜在知識として内在化され、無意識的な行動が可能になる。しかし、ことばの理解と産出をほぼ同時に進める作業はL2学習者にとって認知負荷が極めて大きい。この負荷を低減するのがフォーミュラ連鎖の使用と推測する。フォーミュラ連鎖は語の定型表現であり心的辞書から熟語として検索され、語彙単位での処理が不要である。フォーミュラ連鎖の反復学習が言語産出に及ぼす影響を及ぼすのか実証研究を行った。

- ⑧ G: fMRIによる日本人英語学習者の母語と外国語(英語)の脳内言語処理についての研究

亀井 郁
(滋賀大学)

近年、fMRIなどの非侵襲的な装置の利用により、人間の脳内言語処理の様子を直接、観察することが可能となってきた。本発表では、fMRIを利用して、日本語を母語とする日本人英語学習者の母語(L1)と英語(L2)の脳内言語処理の様子を解析し、それぞれの処理特性から、英語教育の基礎研究となるデータについて報告する。

【第4室】(B207) テーマ: 音読・発音練習
コメンテーター: 山根 繁 (関西大学)・菅井 康祐 (近畿大学)

⑤ M: 口頭並べ替え練習が及ぼす効果の実用性評価 —スピーキング能力向上の可能性—

篠崎 文哉
(大阪教育大学)

大学生 30 名を対象に英語口頭並べ替え (Oral Sentence Building : OSB) 練習が発話能力に与える影響を実証的に検証した。訓練前にメモリスパンテスト、絵描写課題、OSB テストを、訓練後に後者 2 つを実施し、10 週間の OSB 練習を行った (最大 30 回、1 回 10 問)。その結果、リスニングスパン容量が大きいほど OSB テストスコアが高いという傾向が見られた。また、非流暢さに関わるエラー数の減少が見られ、インタビュー結果からは構文力向上の実感が得られていたこともわかった。

⑥ M: 音読における内容理解の予測因子と注意制御について
—日本人 EFL 学習者に対する実証研究—

森 利文
(関西学院大学)

本研究は、これまでのリーディング研究の知見をもとに、大学生、院生を対象に音読と内容理解の関係について検証することを研究目的としています。検討課題としては次の 4 項目について検証いたしました。1) 音読速度、ピッチ変化と内容理解との関係、2) 音読速度、ピッチ変化と音読評価との関係、3) 音読評価と内容理解との関係、4) 音読時における EFL 学習者の注意項目(発音、音読速度、意味理解)の意識比重について。

⑦ M: iPad 発音訓練が及ぼす英語スピーキングスキルへの効果

上田 愛
(大阪教育大学)

日本人大学生に対し英語スピーキング (発音) を向上させるための①音読練習と②対話練習を iPad を利用して半年間実施し訓練効果を比較した。大学生を 2 群に分け、A 群には訓練期間前半に②、後半に①を、B 群では逆の順で実施し、訓練前・前半訓練終了後、両方の訓練終了後に発話テストを実施した。その結果から、発音正確さ向上のためには対話活動のみでは十分でなく、音声に集中しやすい音読活動も必要であり、音読活動後に対話活動を行う点で順序効果がみられた。また iPad を利用した自己・他者評価の導入に肯定的な見解がみられた。追記: JACET2012 秋季大会での発表内容を一部含む。

- ⑧ M: 英語発音の明瞭性に影響を与える要因について
—合成音声を使用した Prosody, Segment エラーの影響度比較—

石田 香織
(関西大学)

英語話者として NS よりも NNS の数が多いことから、発音指導目標として、完璧でなくとも通じる英語を目指す Intelligibility principle (Levis, 2005) の重要性が主張されている。そこで、本研究では、英語の明瞭性(Intelligibility)に重要な役割を果たす要因として、超分節的特徴(Prosody)、と個々の発音などの分節的 (Segment) 特徴のどちらの要素がより重要となるのか明らかにしようとした。また、リスナーの持つ母語の知覚干渉によって、結果も異なるのか調べた。方法として、TTS 合成音声を使用し、segment が正しく prosody の不自然なスピーチ、prosody は自然で segment に誤りのあるスピーチの 2 種類の音声を作成し、これらへの評価を比べた。リスナーとしては、日本人、NS が選ばれた。

【第 5 室】 (B208) テーマ: 教科書・授業

コメンテーター: 氏木 道人 (関西学院大学)・沖原 勝昭 (京都ノートルダム女子大学)

- ⑤ G: EFL リーディングにおける読み手の推論

森 まど加
(京都教育大学)

読解作業では、明示的な情報を理解するだけではなく、教科書に直接かかれていない情報も推論することが必要とされる。本研究は、英語の熟達度と推論能力に関係があるかどうかを調査するものである。大学生 49 名を上位・中位・下位の三つのグループに分け、推論問題を課した。発表では、それらのグループ間に統計的な差はあるのかといった実験結果について考察する。また、高等学校の教科書分析の結果についても考察する。

- ⑥ G: 中学校英語教科書分析に基づいたコミュニケーション方略のテストデザイン及び評価の提案

北浦 友美
(京都教育大学)

学習指導要領にもあるように、外国語教育において「コミュニケーション方略」を指導することは、コミュニケーションを促進する上で有効であるとされてきた。本研究では、中学校で使用されている英語の教科書を方略的観点から分析し、テスト及び評価方法の提案を行う。また実験では、提案した教材をもとにスピーキングテストにおける方略の使用がもたらす影響について考察する。

⑦ M: An Analysis of Activities and Tasks in Japanese Junior High School English Textbooks

橋西 彩楓
(神戸市外国語大学)

It has been widely accepted that a textbook is an essential component of the language classroom. Therefore, evaluation of textbooks to see if they are appropriate and to identify their strengths and weaknesses is of utmost importance. This thesis is an objective description and subjective analysis of activities and tasks in Japanese junior high school English textbooks based on the framework provided by Littlejohn (1992, 1998). As a result of the changes in the course of study for foreign languages to increase classroom activities for practicing communication (MEXT, 2008b), textbooks have needed to respond with new editions. Therefore, it is timely to examine these new versions of textbooks to see if they are following the proposed guidelines. This thesis will divide the analysis into three levels. The first level examines ‘what is there’ in the materials, and the second level considers ‘what is required of users’. The third level considers ‘what is implied’ drawing on the findings at levels 1 and 2. The results indicate that the majority of tasks place learners in a responding position, allowing them little or no control over what they are to say or how they are to say it. Learner initiation, involving freer language expression, is evident in less than 10% of the tasks. Many tasks require learners to repeat input supplied by the materials identically or with substitution, with little demand for deeper mental operations such as hypothesizing, analyzing and so on. Interview, presentation, speech making, and writing activities, which require learners to use the language in a freer way to communicate, are not present in every unit and account for a very low percentage of the activities. Furthermore, only a small percentage of tasks call upon learners to express own ideas/information. Therefore, it seems that the MEXT (2008a) guideline which states that “activities in which students actually use language to share their thoughts and feelings with each other should be carried out” is not fully followed. It appears that the oral abilities aimed at are repetition and reproduction of the target language, but not communicative abilities. The findings show that most of the activities in the textbooks may only be categorized as ‘mechanical’ or ‘pre-communicative’. Hence they prepare students for the communicative activities, which themselves, account for only a small percentage of the total activities.

⑧ M: 国際理解教育は英語教育にどのように貢献
しうるか

河合 冬樹
(大阪教育大学)

本研究は、グローバル化の進行に伴いその必要性が謳われる国際理解教育を、英語教育のなかでいかに実践すべきかを明確にする。まず、英語教育における国際理解教育の意義や課題を明確にし、英語科で指導すべき国際理解教育の内容を提起した。また、中学校の英語検定済教科書を分析し、4技能別に具体的な指導法を調べ、それらの方法に則ったいくつかの活動例を示す。

【第6室】(B209) テーマ: 学習者要因

コメンテーター: 佐久 正秀 (大阪信愛女学院短期大学)・山西 博之 (関西大学)

⑤ M: 高校英語における動機減退要因の分析と克服

大草 信彦
(大阪教育大学)

本研究は、私立高校生 151 名を対象としたアンケートをもとに、ディモチベーション (意欲喪失) となりうる要因を解明し、それらの要因が学習に与える影響を考察し、それらをどのように克服しているのかを研究することを目的とした。アンケートの分析や統計処理を通して、学習者に内在するディモチベーションが、英語学習に深く影響を与え、それらを克服することの困難さや可能性が示された。本研究は、日本の英語教育の改善点を示唆する役割があると考えられる。

⑥ M: 自尊感情と L2 コミュニケーション不安の関係

山中 梓
(関西学院大学)

本調査では、日本の高等学校での英語コミュニケーション活動時に、生徒が感じるコミュニケーション不安と、自尊感情との関係を調査した。不安の程度と原因が自尊感情の高い生徒と低い生徒でどのように変化するかを、比較し、相違点を探った。高校生 309 名に対し質問紙調査を行った。データは SPSS、あるいは KJ 法にて適宜分析された。調査結果から、自尊感情の高い生徒と低い生徒間には不安の程度や原因に違いがあることを実証した。

⑦ M: 小学校外国語活動における自己評価方法と認知プロセス

長谷川 和代
(兵庫教育大学)

本論文は、小学校外国語活動において、児童 (延べ 797 名) による自由記述式自己評価文を、テキストマイニングし、その信憑性、論理性、そして、認知プロセスを調査したものである。分析の結果、自由記述文には信憑性が見られ、論理的に記述されているという発見があった。また、数種の認知プロセスを経た結果の記述であることも判明した。これらの結果に基づき、児童の自由記述文の新たな評価方法を提案する。

⑧ G: 日本人高校生の学習者自律の育成における
学習プロセスの統制と協働学習の諸効果

二宮 宏樹
(京都教育大学)

近年、学習者自律の育成は英語教育のみならず、教育全体からの注目を集めている。本研究は、学習者自律の定義と多様な側面を先行研究より概観するとともに、実験より公立高等学校の生徒の学習者自律の育成を探究した。その育成は、学習プロセスの統制と協働学習によって支えられ、質問紙調査やインタビューなどの量的・質的分析から、特に学習者自律の低かった生徒に、自律性やメタ認知方略使用の促進などの効果が見られた。
